

NPO JCP NEWS

No. 13 2006. 4.25

- ・特集 カンボジア アンコール遺跡群修復現場スタディツアー
- ・世界の修復界は今 フランスにおける文化財修復 2
- ・保存修復の現場から 理想的な文化財保存教育とは
書籍紹介「書庫涉獵」
- ・JCP 事務局通信

特 集

カンボジア アンコール遺跡群 スタディツアー



カンボジア アンコール遺跡群スタディツアーリポート

平成17年11月19日～23日、カンボジアシェムリアップ地域のアンコール遺跡群保存修復現場スタディツアーリポートを行いました。

参加者は21名、スタッフ含めて総勢25名の団体となりました。

旅程は3泊5日（機内1泊）。30度の気温の中、1日に約7～8箇所の遺跡を巡るという強行スケジュールではありましたが、カンボジア政府アンコール・シェムリアップ地域保護管理機構（APSARA）のEr Darith 氏が現地の手配を全て整えてください、通常では入れない遺跡修復現場にも立入らせていただきましたことに加え、引率の講師 西浦忠輝先生（国士館大学教授／当機構理事）、友田正彦先生（株）文化財保存計画協会）の懇切な解説で、とても密度の濃い5日間を過ごせたと思います。参加者は20代の学生さんから50代60代の方まで幅広い年齢層でしたが、果敢に遺跡の頂上まで登攀する姿は、年齢差を全く感じさせないものでした。夜はAPSARAとの交流の宴も催し、アンコールビールとカンボジア料理に舌鼓を打ちました。今回は、参加者の中からお二人の方に、ツアーの報告をしていただきます。

写真提供：大林賢太郎氏／長田寛康氏／千葉麻由子氏



アンコール・ワットの前で記念撮影



宿泊したアンコールホテル



カンボジア料理の数々



シェムリアップ市街



オールドマーケット

カンボジアツアーに参加して

東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センターで研究補佐員として働いていたときに、カンボジアの保存修復プロジェクトに関しては何度も話を聞いていました。しかしいつも留守番で写真から現場の様子を想像するしかありませんでした。今回やっとこれまで話に聞いていた場所に行くことができたのです。

ちょうど雨季の後で、気候は大変穏やかでした。非常に暑くはありませんが（日本ではコートを着ていましたのでギャップがありました）、とても過ごしやすく快適でした。とはいえ、今回のツアーは肉体的にはとてもハードでした。N講師（高いところなど怖いものなし）の企画であることを失念していたのです。初日にしてすでに最後までついていけるか、日ごろ運動不足の私は非常に不安を覚えました。しかし今回のツアーのように、実際に遺跡の保存修復に携わっている方から直接解説を聞きながら遺跡を見学できる機会はなかなかないので、貴重な体験ができると思い、とにかくついていこうと必死でした。そして何よりこれまで話を聞くだけで悔しい思いをしてきた私はその雪辱を果たすべく、といった心境でした。

実際に遺跡群を目の前にするとただただ圧倒されるばかりでした。石やレンガ造りの建物には長い歴史がある

秋山 純子

（東洋美術学校 保存修復専攻 専任講師）

かくついていこうと必死でした。そして何よりこれまで話を聞くだけで悔しい思いをしてきた私はその雪辱を果たすべく、といった心境でした。

実際に遺跡群を目の前にするとただただ圧倒されるばかりでした。石やレンガ造りの建物には長い歴史がある



バイヨン北経蔵

刻まれており、様々な表情をしていました。特に浮き彫りされた装飾は現在でも鋭敏さを保ち、そのすばらしさに感心するばかりでした。石を正確に組み上げてこれだけの巨大な建物へと作り上げていくこの技術の高さは、どこから生み出されてくるのでしょうか。この巨大な建物を直に感じ取りたい、その高さを実感したい、そう思い、登れるところはできる限り登りました。登ってみると非常に眺めが良く、下界とは切り離されている感じがして、これだけの巨大な建物を建設した当時の人々の思いが伝わってくるようでした。登れば降りなければなりませんが、とにかく石の階段は急で、幅も狭く丸みを帯びているので、高所恐怖症の私は足をがくがくさせながら石にしがみつき一歩、一步ゆっくりと降りていきました。するとその横を何事も無いように軽快にとんとんと降りていくN講師の姿がありました。遺跡の現場で働く人はこうでなくてはいけないのだなあとつくづく思いました。

いよいよ東京文化財研究所のプロジェクトの現場であるタ・ネイ遺跡にやってきました。やはり実際に自分の足でその場に立ち、自分の目で見てみないと、百聞は一見に如かずとはよくいったものです。想像していたのとは随分と違っていました。何よりも現場は日々刻々と移り変わり、生きているのだと実感いたしました。気候の変動、環境の変化、生物の活動、荒廃……どれ一つとしてそこに同じ状況でとどめておくことは

できないのです。これは東京で写真を見ているだけでは分からぬことでした。現場での保存がいかに難しいか、改めて感じずにはいられませんでした。それとともにやはり保存修復を勉強していく以上、現場を知らなければならぬことを再認識しました。

今回のツアーに参加し、一番印象に残ったことはアンコール遺跡群の中に様々な国があり、それぞれの国が独自の修復方針で修復を行っているということでした。このように同じ遺跡群の中で各国の修復を比較できる状況はそうは無く、それぞれの国の考え方、方向性を知ることができて非常に興味深かったです。今後どのように進んでいくのか多くの課題を含んでいると感じました。

最後に今回のツアーで非常に貴重な経験をさせてくださいました西浦忠輝先生、友田正彦先生、Ea Darithさん、JCP の八木三香さん、松本洋子さんに感謝申し上げます。また今回のツアーに参加された皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。



遺跡の前に立つ秋山さん

NPO JCP APSARA 共催のカンボジア アンコール遺跡群スタディツアー —講師に西浦忠輝先生、友田正彦先生、Ea Darith 氏を迎えて—

筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻 千葉 麻由子

アンコール遺跡群—アンコール・ワット、アンコール・トムを代表とするこの遺跡群は、9世紀初頭から約600年間カンボジアを支配したクメール人によるアンコール朝の建造物です。15世紀に放棄されて以来1860年に発見されるまで密林の中で眠っていました。その後も自然の侵食や戦禍により荒廃し崩壊の危機にありました。1992年世界遺産リストに登録されると同時に、危機遺産リストにも登録されました。これにより、国際支援による保存修復作業が盛んに行われるようになりました。2004年、アンコール遺跡群は当面の危機は脱したとし、危機遺産リストからは除外されました。現在も依然として「修復オリンピック」と称されるように、各国がアンコール遺跡群のそれぞれのサイトで修復活動を行っています。

「カンボジア遺跡でのカンボジア人の主体性」の尊重から、どのサイトでも支援国とAPSARA機構の共同修復作業というかたちがとられています。カンボ

ジア人技術者の養成というのも支援国に課せられる大きな任務です。

保存修復に対する理念は、各国さまざまです。「何を、どこまで、どのように残すのか」。

遺跡群における保存修復全体のガイドラインを示す国際調整委員会ICCが創設され、意見交流が行われていますが、基本的には各国それぞれの方法が尊重されています。この先カンボジア遺跡の保存修復をカンボジア人が主体的に担っていくときに、カンボジア人独自の修復理念を創造していくほしいと思うと、現在の状況は問題があるように思います。

膨大な数を擁する遺跡群はこれからも国際協力を求め続けるでしょう。遺跡そのものが抱える顕在的危機は脱しましたが、将来に向けての遺跡運営は大きな問題をはらんでいます。遺跡保存が優先されることによる地域住民の周辺化、観光開発との折り合いは、すでに生じている深刻な問題です。

今回のスタディツアーやでは、各国の修復現場を現地スタッフのレクチャーを受けながら見学することができました。作業そのものも非常に興味深かったのですが、各国の修復への取り組みを比較しながら見学できるというのはアンコール遺跡群ならではだと思います。

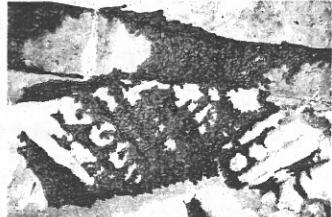
プリア・コー

ドイツとAPSARAによる共同修復作業が行われている。

レンガ建造物、装飾漆喰の保存修復。深刻と思われるは生物被害。大量に発生しており内部組織崩壊の恐れがある。



プリア・コーでのAPSARA職員による説明



プリア・コーの建造物を侵食する甲虫。

タ・ネイ

タ・ネイは、カンボジア人若手スタッフの研修フィールドとして活用されており、APSARAによる研修レクチャー小屋が設置されている。

2001年12月より東京文化財研究所とAPSARAによる保存科学の調査研究および研修が行われている。環境計測作業や石材クリーニング実験などが実施される。



タ・ネイで説明する西浦副理事長(左右とも)

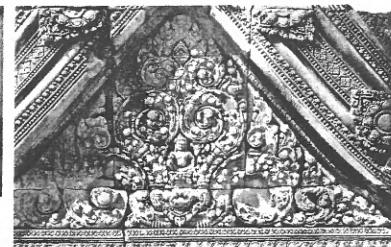
バンテアイ・スレイ

イスラエル政府とAPSARAによる共同プロジェクト。

樹木の倒壊による建物の破壊の懸念から、寺院周辺樹木のインベントリーとモニタリング。ボーリングによる地質調査。寺院発掘調査により、ラテライトの床面があらわれる。



立ち入り禁止区域見学用パス



バンテアイ・スレイのレリーフ



説明するEr·Darith氏

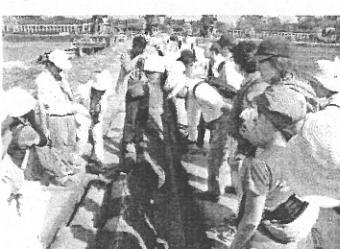
発掘されたラテライトの床面

アンコール・ワット

一西参道

'96年より上智大学を中心とするアンコール遺跡調査団内に組織されたアコール・ワット修復委員会による解体・再構築工事が行われる。当時の建築技術の保存を目的とした修復。カンボジア人の技術養成に尽力している。

アンコール・ワット西参道工事現場



アンコール・ワットでの説明会

一第2回廊

ドイツのケルン工科大学を中心にアンコール保存事務所とAPSARAが現地側のカウンターパートとして協力し、German Apsara Conservation Project(GACP)という非営利組織の体制をとる(プリア・コーの修復隊と同組織)。

浮き彫りの保存修復。リスクマップの作成。既往修復によるセメントモルタルの除去作業。エチリシリケートモルタル(シェムリアップ川の砂岩を粉碎したもの)を混入)で再充填。さらに固定が必要なものは



アンコール・ワット第2回廊のレリーフ



アンコール・ワット北経蔵

穴をあけ、グラスファイバーを通して固定する。非常に緻密な作業が行われている。

一北経蔵

JSA（日本国政府アンコール遺跡救済チーム）により'05年に修復工事完了。

JSAはアンコール遺跡群における建物の様々な破損状態に対する修復手法の提案を目的として、各サイトを選択。アンコール北経蔵では被修復歴を持つ建物の価値をどのようにリノベートしていくかの模索がテーマとされた。

バイヨン

一北経蔵

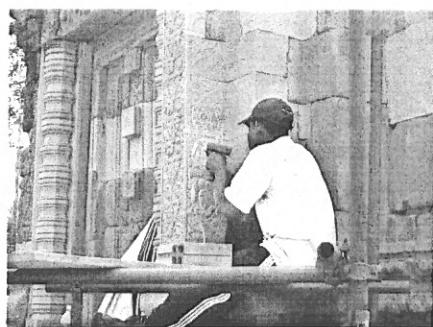
JSAにより1999年に修復工事完了。

アンコール遺跡群に最も多い典型的な崩壊に対する中規模の解体再構築を目的とする。外観の保存と同時に構法のオリジナリティーを可能な限り尊重し、かつ原構法のもつ構造的弱点をカバーする手法を修復に適用。破断した砂岩部材はステンレスボルトを挿入してエポキシ系接着剤に砂岩粉末を混入して固定し、直射日光を浴びる目地部分は砂岩粉末と砂と無機顔料で調色したポリマーセメントで保護した。

チャウ・サイ・デヴォダ

2000年より中国の修復隊が作業をしている。

新材の表面加工について、装飾モチーフ全体の輪郭だけを彫刻する方法、装飾モチーフの図像の外側だけを彫刻する方法、オリジナルと全く同じ程度に装飾を仕上げる方法などが試みられた結果、現在は図像の外側だけを彫刻する方法が採



チャウ・サイ・デヴォダの作業風景

用されている。彫刻技法の訓練を受けたカンボジア人によって仕上げられている。

プラサート・スープラ

全12基のうちN1塔、N2塔がJSAの保存修復対象となる。大きく傾いた塔の地盤基礎からの根本的な修復が目的とされた。

N2塔は2003年

9月に部分解体・再構築が完了。N1塔は本格的な全解体・再構築手法による保存修復作業が行われ、2005年4月に工事が完了した。ラテライト造塔状構築物の解体を伴う保存修復は事例がほとんどないため、組積方法の研究、部材修復方法やその材料の研究開発が必要であった。基礎・基壇部の詳細発掘調査から、塔の傾斜要因を解析し、塔の安定化のために開発された消石灰改良土を使用してオリジナル工法に近似した版築工法によって再構築された。

※参考HP: JSA(日本国政府アンコール遺跡救済チーム)

HP <http://www.angkor-jsa.org/>



プラサート・スープラ:N1塔と友田先生

今回のスタディツアーでは上記の遺跡で詳細なレクチャーを受けることが出来ました。フランス極東学院EFEOのサイトであるバプーイン、世界記念物基金WMFのサイトであるプリア・カンでのレクチャーは次の機会を期待します。

西浦先生は元東京文化財研究所保存科学部長として、友田先生はJSAの元シェムリアップ事務所長として、アンコール遺跡保存修復現場の第一線で活躍されており、お二人からレクチャーしていただけることは、本当に貴重な体験でした。またEa Darith氏は京都大学大学院に国費留学生として在籍、修士号取得後帰国し、現在はAPSARAに勤務しています。まさに日本側とAPSARA側のパイプ役のエキスパートで、Darith氏なくして今回の充実したスタディツアーは在り得なかっただろう。お三方には保存修復のレクチャー以外にも、カンボジアの文化や国際協力の在るべき姿など、長年カンボジアの現場に携わってきて得た経験談を披露して頂きました。それがスタディツアーの内容をさらに濃く充実したものにしたエッセンスでした。

私は今後、保存マネジメントをテーマに、アンコール遺跡を題材として模索していきたいと思って

います。今回のスタディツアード得たものは、このテーマに取り組む上での大きな礎となるでしょう。冒頭で述べたように問題は山積みなのですが、そんなものを相殺してしまうカンボジア・アンコール遺跡群のすばらしさ。私もいつか先生方のような遺跡保存の専門家になれるよう頑張りたいと思います。

※千葉さんの報告は、当機構HPにも掲載中。写真もたくさん載っています。



Phnom Bakhengで象に乗る参加者

平成18年度

スタディツアードのお知らせ

平成18年度スタディツアードは、タイに決定しました。日程は、平成18年11月1日（水）～11月6日（月）。アユタヤ、スコータイなどの遺跡保存修復現場を回ります。

詳細は近日中にお知らせする予定。

ふるってご参加下さい。

世界の修復界は今

第7弾 フランス②

ヴァレリー・リー

「フランスにおける文化財修復」

前回の本稿 (NPO JCP NEWS 12号 2006.1.1) で見てきたように、保存修復家は、4校ある公認保存修復学校の中の1校、または民間の保存修復スタジオにおいて実習生としてトレーニングを受けることができます。博物館や美術館から保存修復家へ依頼される件数が非常に少ないため(パリの国立図書館 (National Library) は、職員として保存修復家をかかる数少ない主要組織の1つです)、若い保存修復家は、トレーニングが終了したら、自らのスタジオを立ち上げるか、既存のスタジオに参加することになります。その後、彼らは、博物館や美術館からなる公共市場と収集家と骨董店からなる民間市場という大きく異なる2つの保存修復市場に適応しなくてはなりません。

公共市場

2002年、「政府公認の保存修復学校からの修業証書を持つ保存修復家だけがフランスの博物館や美術館で働くことができる」という新しい法律が施行されました。修業証書を所有していない場合でも、この法律の施行以前に5年以上博物館や美術館で働いてきた保存修復家は、認定試験を受験することができます。認定は今現在もおこなわれています。これは非常に難度の高い試験で、保存修復家は、化学、材料科学および美術史に関する知識を最新のものにするためにパリにあるINPまたはMSTにおいていくつかの保存修復講座を受けるよう要求される場合もあります。

博物館や美術館は、2つの方法で保存修復家を選抜します。保存修復作業費が140万円未満であれば、専門職員が自分で保存修復家を選ぶことができます。多くの場合は、その専門職員と共に仕事をしてきた保存修復家が繰り返し選ばれます(長年に渡り両者間に築かれてきた信頼関係です)。保存修復作業費が140万円を超す場合、その保存修復プロジェクトは

II フランスの保存修復市場

入札のために公表され、保存修復家は誰でも処置提案書 (treatment proposal) を提出することができます。処置提案書は、提案書の採用を決定する審査員団に送付されます。入札は、政府支出を管理し、より多くの保存修復家に博物館や美術館で働く機会を提供することを目的としています。しかし、いくつかの問題点が挙げられます。第1に、金額の低い処置提案書が選択されることが多いために、保存修復家団体に対して速く、安価な処置を優先するよう圧力がかかることがあります。第2に、費用を削減しやすい大規模なスタジオが選ばれやすいということです。

博物館や美術館は、対象物を処置する際に自らの施設内で実施するか、民間のスタジオに送付するかを選択することができます。対象物を処置のために民間のスタジオに送る場合は、保険をかけなければならず、そのため費用が大幅に増加します。ルーブルなどの大規模美術館は、個人の保存修復家に共同で使用する場所と設備を提供しています。しかしながら、博物館や美術館のほとんどは保存修復スタジオを所有していません。その結果、保存修復家は、博物館や美術館内で、最低限の設備を用いて作業を行わなければならず、さまざまな状況に即興的に応じる必要があります。

国家の保存修復予算は、全体としては非常に固定的ですが、博物館や美術館の優先順位は変化しています。博物館や美術館は、予防的な保存修復研究を求めていたため、保存修復家が仕事を得るには、予防的な保存修復に関する自らの知識を新しいものにする必要があります。

民間市場

こちらの市場は、すべての保存修復家に対して開かれています。しかしながら、美術市場経済との結びつきが強いこと

から、民間市場は非常に不安定なものとなっています。美術品商や収集家は、非常に高度な技術を持つ保存修復家を捜し求めているのと同時に、対象物を「元の状態」に戻す処置を好みます。依頼主と保存修復家との関係は、信頼と保存修復家の名声に基づいています。美術商は何年間も同じ保存修復家と組んでいることが多いため、新規参入者がこの市場に参入することは困難です。

フランスの保存修復家は、大きく趣を異にする状況にも、変化し続ける公共市場にも対応しなくてはなりません。若い保存修復家にとって、保存修復市場は厳しい世界です。彼らは、履修過程において博物館や美術館の対象物に保存修復処置を施すことについては十分なトレーニングを受けていますが、ビジネス面の実践に関する知識はほとんど得ることができません。将来的には、入札に対応するために大型の保存修復スタジオ（現在、スタジオの三分の二は、3人以下です）が設立されるかもしれません。ヨーロッパのスタジオが、ラ

ンスの保存修復市場に積極的に参入することも考えられます。ただし、このような動きがほとんど進んでいないように見えることから、保存修復家の多くは、博物館や美術館から1つでも多くの就職口が提供されることを望んでいます。

日訳：田中寿子（ティーピーエスシステム株式会社）

ヴァレリー・リー氏 プロフィール

ソルボンヌ大学において美術史学士取得。

1996年INPよりペーパーコンサバターの修士取得。

2003年まで、アメリカ合衆国フリアーアンドサックラー・ギャラリーにおいて、アシスタントコンサヴァターとして、中国絵画の保存に従事。

その後フランスにおいて美術館の西洋アジア素描コレクションを中心に活動。

現在NPO文化財保存支援機構（JCP）の登録会員として、東京国立博物館文化財部保存修復課に派遣され、同博物館収蔵品のうち、特に東洋美術の応急修理に携わっている。

Conservation in France II the conservation market in France

Valerie Lee

As we have seen in our previous article (NPO JCP news 12, 2006) conservators can be trained in one of the four accredited conservation schools or in private conservation studios as apprentices. Because very few conservator jobs are being offered by museums (the National Library in Paris is one of the rare major institutes that have conservators as staffs) young conservators open their own studio or join an existing one after their training. They will then have to adapt to two very different conservation markets: the public market of museums and the private market of collectors and antique shops.

The public market

In 2002, a new law was implemented that allowed only conservators with a diploma from a government accredited conservation school to work for French museums. Conservators who did not have a diploma but worked over five years for museums before this law could take an accreditation examination. Accreditations are still being given as we speak. It is a challenging process: conservators may be asked to follow some conservations classes at the INP or the MST in Paris to update their knowledge in chemistry, material sciences and art history.

Museums select conservators in two different ways. If the conservation work costs less than 1.4 million yen, the curator can choose conservators on his own. It is often the same people who have been working for the curator, a trust relationship having been built up over the years. In case the conservation work is over 1.4 million yen, the conservation project is disclosed for public bidding and any conservator can send a treatment proposal. The proposals are reviewed by a jury that decides which one will be accepted. This public bidding is aimed to control the government expense and to give a chance to different conservators to work for museums. However some issues can be pointed out. First, the cheaper treatment proposal is often selected, putting pressure on the profession to prefer quicker and cheaper treatments. Second, bigger studios have more chance to be selected as they can lower their cost easier.

Museums can choose to have their objects treated inside the museum or to send them to private studios. If the objects go to private studios for treatment, insurance has to be taken, raising the cost significantly. Big museums such as the Louvre are offering space and equipment for private conservators to share. However the majority of museums

do not have conservation studios. As a result, conservators must perform their work in museums with minimum equipments and need to improvise to various situations.

The national conservation budget is quite stable as a whole but museums' priorities are changing. Museums are asking for more preventive conservation studies and conservators must update their knowledge in preventive conservation in order to stay competitive.

The private market

This market is open to all the conservators. However, its strong ties to the art market economy make it quite unstable. Art dealers or collectors are looking for highly skilled conservators and prefer treatments that will put the object back into its "original state". Relationships between the clients and the conservator are based on trust and on the fame of the conservator. Dealers are often working with the same conservators for years and it is difficult for the new comers to break into this market.

French conservators need to adapt to very different situations and to a changing public market. Young conservators find the conservation market particularly difficult. They are well prepared for providing conservation treatments to museum objects but gain little knowledge in business practice during their curriculum. In the future, we may see bigger conservation studios being created (now two third of the studio have less than three people) in order to better answer to the public biddings. European studios may also come strongly into the French conservation market. Many conservators are hoping that more positions will be created in museums as this process seems to have started slowly.

Profile

Valerie Lee received a B.A. in art history at the Sorbonne University and a M.A. in paper conservation from the INP in 1996. She specialized in Chinese painting conservation at the Freer and Sackler Galleries (Smithsonian, U.S.A) where she worked as a assistant conservator until 2003. She is working for French museums on Western and Asian drawing collections and is currently a member of JCP. She is now working as a JCP contract conservator at the department of conservation of the Tokyo National Museum and carries out remedial repairs and care on the Asian painting collection.

保存修復の現場から 理想的な文化遺産保存教育とは？

福島 綾子

(九州大学大学院芸術工学研究院環境計画部門助手 JCP登録会員)

私は今年の2月に東京の民間企業から九州大学の助手へと転職をしたばかりである。九大では、上記の部署に属し、歴史的環境保全、まちづくり、観光学等々をおこなっている西山徳明教授の研究室と主に活動している。大学という職場は私の人生で全く新たな環境であり、そこで学生を指導する教員としての立場になったわけであるが、文化遺産保存の高等専門教育の状況、あり方、問題等々については随分以前から深く考えを致している。

私自身が学部生だった頃、文化遺産保存の専門コースのある大学院への進学を考えたが、受験はしなかった。一度社会人となった後、文化遺産保存の大学院教育を受けることを決意した時、日本で教育を受けずにアメリカへ留学した。それにはどうしても海外で教育を受けるべきだと思った個人的理由もあるのだが、日本で保存教育を受けた後の展望が見えなかつたことも理由のひとつではある。

いかなる組織や個人も侮辱する意図は毛頭ないが、日本での保存教育の需要と供給のアンバランスさは誰しも認識するところであろう。保存を学びたい若者は年々増加しているようであり、それに呼応するかのように保存教育の専門コースは毎年のように新設されている。日本の保存教育が抱える問題は様々であるが、一番深刻な問題は保存専門家が定着していない日本の文化、社会基盤にあると私は考えている。

私が留学していたのは、アメリカのペンシルバニア大学デザイン研究科文化遺産保存コース (Historic Preservation Program) 修士課程である (2002 - 2004年)。アメリカには、多くの文化遺産保存の高等専門教育プログラムがあり、その大半は大学院修士課程である。ペン大には保存の学部教育はなかったし、他大学の学部レベルで保存教育を受けたというクラスメートも極めて少数。いわば保存の素人が半分以上を占めるような状況で2年間のプログラムはスタートする。アメリカの大学院教育のハードさは噂に違わないもので、修士の2年間は勉強や研究というより、猛烈な特訓、体と頭の訓練といった方がより正しい表現かもしれない。そして無事修了した人々はどうなったかというと、卒業後1年間程度のインターン（ほとんどが有給）として経験を積み、その後保存専門家(Preservationist)として国内外の様々な場所に就職し、活躍している。私が把握している限りでは、地元フィラデルフィア市の文化遺産保存行政担当官、ゲティ

保存研究所のコンサルタント、保存専門の建築事務所のスタッフ、などなどである。もともと優秀な人材が集まっていたということもあるが、このような輝かしい活躍の背景には、アメリカの保存をめぐる社会基盤が関係している。アメリカでは、多くの建築事務所が保存事業を手掛け、保存の専門家を抱えている。また行政においても、各レベルの大多数の自治体には Historic Preservation Office と呼ばれる文化財行政の部署があり、そこにはいる職員は日本のように行政発掘を行う埋蔵文化財の専門家だけということではなく、建造物や保存計画の専門家がいる。保存活動を行うNPOの数も日本とは桁違いである。要するに、アメリカでは保存を生業とする社会基盤がしっかりと根付いている、ということである。

日本の大学・大学院で保存教育を受けても、専門職に就ける人はあまりに少なく、また就職までにあまりに長い時間がかかるてしまう。そういう現実があっては、保存を教える側もどこか、自信をもって教育をし、学生を社会へ送り出すことができていないのではないか。私はそんな気がしてならない。

保存とは境界領域であり、保存教育では下手をすると、中途半端な使い物にならない学生を生み出してしまう結果にも成りえる。だが、逆に境界領域であるからこそ、専門分野を横断的に理解し繋ぐことのできるジェネラリストとしての保存専門家を育て、自信を持って送り出すことのできる保存教育を私自身はおこなっていきたいと思う。これを実現させるには、教育と同時に、一研究者、専門家として保存を日本の恒常的文化・社会基盤に組み込み、より浸透させていく努力と活動をおこなっていきたい。NPO JCPはそのような保存専門家を世に根付かせるためのプロセスの先駆けであり、期待と協力をしている次第である。

福島綾子さんプロフィール

神奈川県生まれ

2000年

早稲田大学大学院文学研究科修士課程(考古学)修了

2002年～2004年

ペンシルバニア大学スクール・オブ・デザイン文化遺産保存プログラム修士課程留学・修了(米国)

2004年～2006年

(株)キャドセンター

2004年2月～現在

九州大学大学院芸術工学研究院環境計画部門助手
専攻は、Heritage Preservation(文化遺産保存)

訃報

NPO 文化財保存支援機構の賛助会員である株半田九清堂会長の半田達二氏が平成18年4月15日、ご逝去されました。

氏は、株半田九清堂を創立し、指定品を始めとする東洋書画、文書の修復に携わる一方、東京藝術大

学大学院、東京学芸大学等で後進の指導にも力を注がれました。平成9年11月 文化庁長官賞受賞、平成11年11月 黄綬褒章授章。

ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

書籍紹介

宮内庁書陵部

「書庫涉獵」(ふみくらしょうりょう) —書写と装訂—

柳箒 節男 著 おうふう発行
2006年2月20日発行 定価: 3,800円+税 238頁 A5判

宮内庁書陵部の歴史は、遠く律令制時代にまで遡る。

宮廷文化資料を中心として、徳川幕府や大名家に伝えられた漢籍から明治政府の資料、陵墓関係資料など収蔵し、その多くが原本か古写本であるという。研究者や好事家でなくとも、垂涎の的の「本物」揃いである。

著者は、書陵部図書課でそれらの整理、保存、書誌情報のデータ蓄積などの仕事に従事してきた。

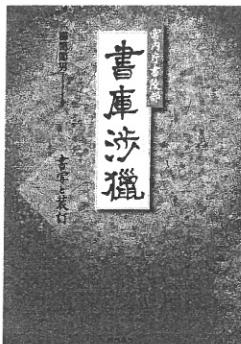
本書は、「本物」から得られた情報を ①形態、②書写と道具、③複本作製、④綴じ方いろいろ、⑤装訂名称の混乱と経緯、⑥本の大きさと紙、⑦様々な改裝、⑧「古今伝授資料」、⑨その他、⑩帙 などの章に分け、豊富なカラー図版と共に開陳している。どのページにも「本物」の迫力があふれている。

専門家以外には少々難解な部分もあるが、まずは手にとって眺めることをお勧めしたい。

そのためのオールカラー図版である。

著者は「本物」に囲まれて仕事をすること数十年、その稀な幸福をお裾分けしてくれる書物である。

(八木)



事務所紹介

池之端事務所に遊びに来てください。

当機構事務所は3月24日、新宿区から台東区池之端に移転いたしました。現在漸くダンボール箱も減りつつあり、仕事ができる状態に落ち着いてまいりました。



思えば文京区根津1丁目 → 根津2丁目 → 新宿区三栄町 → 新宿区本塙町と目まぐるしく移転を繰り返してきましたが、JCP誕生の地に里帰りして、漸く安住の地を得た心地です。住所は台東区池之端ですが、最寄の駅は東京メトロ千代田線根津駅です。湯島寄り出口から徒歩3分。交通至便な場所にあります。上野の博物館美術館、東京藝術大学にも程近い距離にありますので、上野へお越しの際は是非お立ち寄り下さい。

狭いですが、各種紹介のパンフレットなどを置けるスペースも用意しております。賛助会員法人様の企業案内、修復材料の紹介、イベント案内などのご利用に、ご相談承ります。

また、会員寄贈による『日本の美術』約300冊が揃っています。文化財関連資料も徐々に整えていく予定。

界隈には下町風情が残り、散策もお勧めです。

JCP事務局通信

NPO文化財保存支援機構

平成18年度定例総会／事業報告会

○日 時：平成18年5月21日（日）

○会 場：東京都現代美術館 講堂

（東京都江東区三好4-1-1 TEL: 03-5245-4111）

○内 容：

10:30～12:30：総会：平成17年度決算報告、事業報告、平成18年度予算、事業計画（運営会員のみ議決権を持ちます。その他の会員は、傍聴はできますが、議決には加われません）。

14:00～16:30：事業報告会：前年度までに行った事業の中からいくつかを選んで報告をいたします。

香川県被災文化財救援活動報告

鷺島海底遺物保存処理報告 ほか

○参加費：無料

○定 員：100名

※お申込み、お問い合わせはメール

jimukyoku@jcpnpo.org

あるいは、TEL03-6770-1682 FAX 03-6770-1683まで。

新芸能人の多彩な展覧会—絵画は地球を救う

文化財保存活動支援を目的としたチャリティー展覧会。

○主 催：新芸能人の多才な展覧会実行委員会/NPO文化財保存支援機構

○日 時：平成18年5月8日（火）～10日（水）

9:30～16:30（17:00閉館）

○会 場：憲政記念会館（千代田区霞ヶ関永田町1-1-1）

○出展者：市川団十郎、北野武、デヴィ・スカルノ、松本幸四郎、八代亜紀、雪村いずみ等46名

○贊助出展：衆議院芸術議員連盟会員議員有志15名

○特別贊助出展：上村淳之画伯

○入場無料

○企 画：ラリス株式会社

文化財保存修復学会大会

○会 期：2006年6月3日（土）～6月4日（日）

○会 場：世田谷区民会館

（世田谷区世田谷4-21-27）

○6月4日（日）、当機構のポスター発表を行います

○申し込み等詳細は、http://www.soc.nii.ac.jp/jscjp/06KOKUSHIKAN/2nd_c.html をご参照下さい。

ご入会ありがとうございました。――――――

(平成18年4月25日現在入会者数)

理事 6名 運営会員 16名

登録会員 152名 一般会員 100名

賛助会員 25件

(株)宇佐美松鶴堂

(株)岡墨光堂

(株)和蘭画房

桂文化財修理工房

(財)元興寺文化財研究所

(株)京都科学

京都造形芸術大学 歴史遺産研究センター

(株)芸匠

(株)光影堂

コンテンツ株式会社

(有)坂田墨珠堂

(株)修美

宗教法人 正法院

靖斎文化財保存研究所

日本通運株式会社美術品事業部

長谷川和紙工房

(株)半田九清堂

百元 節

(株)文化財保存

(有)文化財修復技術研究所

溝川商店

他個人4名

(アイウエオ順 敬称略)

NPO JCP の活動に

参加してみませんか？

登録会員：年会費 7,000円

文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。

登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

一般会員：年会費 5,000円

この法人の目的に賛同し、支援する個人。

賛助会員：年会費 一口 50,000円

この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典 季刊情報誌の送付

講演会 / 研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL/FAX:03-5363-4533

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL:www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

郵便振替 00120-4-10545 NPO JCP

UFJ銀行 四ツ谷支店 普通預金 3960340

編集後記

●今年の桜は天候不順もなんのその、見事に、そして長く咲き誇りました。極寒の夜桜見物というまれに見る経験もさせてもらい、近年になく楽しませてくれました。そして桜の散る便りとともに、みごとな散り際を感じさせる報に接しました。現役のまま逝けたことは、ご本人にとっても幸せなことだったのだろうと思います。ご冥福をお祈りいたします。

(嶋)

●ようやく懐かしい根津に戻ってきましたが、ホッとするのも束の間、18年度はすでに急展開を始めています。5月からは、ラリス株式会社企画による、文化財保存のためのチャリティー展も始まります。

往く人来る人……なんとなく波乱万丈を予感させる18年度の幕開けです。(M.Y.)

N P O J C P N E W S

第13号

2006年4月24日発行

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

〒110-0008

台東区池之端4-14-8 ビューハイツ池之端103号

TEL:03-6770-1682 FAX:03-6770-1683

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

〈理 事〉

三輪 嘉六（理事長）

大林 賢太郎（副理事長）

西浦 忠輝（副理事長）

伊原 恵司

白井 久明

増澤 文武

〈事 務 局〉 八木 三香（事務局長）

松本 洋子

〈編集協力〉 嶋根 隆一（伝世舎）